

令和元年度 三春町総合教育会議会議録

- 1 招 集 日 時 令和2年2月20日(木) 午後1時30分
- 2 招 集 場 所 三春町役場 2階 公室
- 3 出 席 者 町長 坂本浩之、教育長 添田直彦、
教育長職務代理者 渡辺勉、教育委員 宗像俊樹、
教育委員 宮田美穂、教育委員 太田文枝
- 4 事 務 局 総務課長 伊藤朗、教育次長兼教育課長 本間徹、
生涯学習課長 藤井康、総務課庶務グループ長 今泉喜徳、
教育課学校教育グループ長 大内佳代子、教育課主任主査 小野寺百絵
- 5 傍 聴 者 なし
- 6 開 会 午後1時30分
- 7 閉 会 午後3時15分
- 8 会議の概要
 - (1) 開会
 - (2) 町長あいさつ
 - (3) 協議事項
 - ・これからの三春町の教育について
 - ・その他
 - (4) 意見交換
 - (5) 閉会

<町長>

教育長から教育行政全般の話と教育長としてどういうことを考えているかを話してもらったわけだが、一通りみなさんの意見を聞かせていただいて、意見交換をしていきたい。

<渡辺委員>

2月4日、主体的・対話的で深い学びによる授業実践の御木沢小学校授業研究会に参加してきた。一般社団法人麻布教育研究所の永島孝嗣先生が来校し、町内小中学校の教員、教育委員では宮田委員とわたしが参加した。御木沢学校6年の道徳科の授業を参観した。授業参観の後、授業の中の子どもから何を学んだかという課題を出された。従来だと先生の教え方について議論をする。この課題に先生方も驚いた状況だった。45分間の授業の中で児童の状態を常に把握してないと質の高い授業、学びができないという指導をいただいた。先生方からは感嘆の声が出た。今までにない方法で感動した。

佐藤学先生の本を読んだが、その時の授業の進め方が書いてあり、それにのっとった授業、授業参観の後の協議であった。この形でこれからの三春町の教育を進めていくと理解した。このやり方であれば、子どもたちが全員、授業の中で誰しもが学ぶという哲学で教育をすることになっており、この哲学を取り入れた方法で三春町の小中学校の授業、教育が進められていけば、素晴らしい子どもたちが育つのではないかと思う。ぜひともこのやり方を取り入れていただきたい。

<宗像委員>

試験のための勉強ではなく、人間力が大事であるということをやっつけようとするのはとてもいい方針だと思う。ただ、先生たちや保護者がついていけるのか。先生たちの意欲だったり、また異動があるので、方針として受け入れてしっかりと根付くまでにいけるのか。先生方のレベルも様々で、若手がいればベテランもいる。それを形にするのは、なかなか大変なのではないかという気がする。

保護者の認識について、先生と保護者の関係がもう少し上手くいくといいと思う。PTA会長などをやっつけて、感じていたことである。校長先生が先生たちといっしょに作る学校と、PTAはPTAでどこからも触られないことであり、こうしなさいという人もいないし、難しい関係ができるときがあるのではないか。意欲的なPTAの人が多ければいいのだろうが、当然そうではない人もいる。

<宮田委員>

人間力を育てることはとても大事で、一番重要視して教育を進めていくべきだと思うが、以前と比べて三春町の教育水準が低下しているのではないかと、保護者間でそういう印象を持っている方もいる。中学校から進学校への進学率の低さや、中学校訪問をした際には、高校卒業後もっと勉強したいという意欲を持った子が少ない、高い目標がなくては意欲に繋がらないことが問題ではないかという話をうかがった。改善して底上げをしていく努力を常にしていくこ

とが大事である。小学生の段階から学ぶ喜びと学ぶことの意味を実感として感じられる体験をしてほしい。中学生には、未来にたくさんの可能性があって選択肢がたくさんあるのだということを見据えてほしい。そうするには、町民の日常生活に常に教育の機会が見えるといい。生涯学習の場の保障である。いくつになっても学ぶことの楽しさを知っている大人の姿を見せる。各施設の充実や、新しく学ぼうとしたり、自ら学ぶ機会を提供しようとする人たちを支援する取り組みをしていくべきではないか。

子どもたちの憧れる将来像をできるだけ具体的に感じてもらうために、田村高校が今ある学校の特徴をいかしてもっと魅力的な学校になってほしい。田村高校の生徒たちの心根のよさであったり、また部活動で名を上げてきた基盤がある。そこをうまく活用して本気でやりたい子供が集まってくる場所になってほしい。少子化により高校の統廃合が出てくるが、地理的に三春は郡山に通いやすいので不利である。絶対に田村高校がなければならぬところを確立してほしい。田村地区の進学校の一面を獲得してほしい。田村高校生の姿が、日頃子どもたちに見えるような形になったらいいと思う。ボランティア活動や校外活動、部活やスポーツ少年団でいっしょに活動するとか、体験入学を中学1年からするとかして、高校生になることが楽しみと思えるといい。高校生とのふれあいを通して、中学生たちがもっと先まで希望や可能性を見出せるようにならないかと考えている。

家庭で勉強できない環境にいる子どもの勉強の場を確保したい。学校でもまほらのような施設でも地域の公民館でもいい。町民のくらしの中に教育のチャンスがたくさんあれば、三春の教育が底上げできるのではないか。

<太田委員>

教育立町の説明があったが、基本的に大賛成である。ぜひとも力強く推進してくださることを楽しみにしている。

現在、離婚率が非常に高く、シングルマザーが多い状況の中で、経済的時間的に余裕がなく、安心して子育てが出来ない実態がある。子ども家庭総合支援センターの実行的な活動が、町民目線に立った支援となることを願っている。特に0歳から未就学児の子どもの遊び場の充実を切に願う。同じ年頃の子どもと触れ合い、親たちの交流が必要だと思う。既存の中でも子どもが集えば、親も集う。安心して生み育てる、そして小学校に接続していく環境づくりができるような形になるといい。

夢と誇り、愛郷心を持たせるためには、体験活動が必要になる。広報みはるの「町長短信」で西方の水かけまつりのことが書かれており、参加することで郷土心が育まれるとあった。先生たちが自覚を持って活動をすることによって、子どもたちを育成し、夢や誇りに繋げるんだというような体験活動をさせてほしい。

生きがいは、人のためになったとき、人からありがとうと言われたときに感じるのだそうだ。例えば小学校から英語を学習しているが、人のために英語を使う視点を入れてアウトプットする実践の場を設けてほしい。桜のシーズンには外国の方がたくさん来る。滝桜に行っても英語で10人にあいさつする、それだけでもコミュニケーションができる。5、6年生だったら三春のいいところを英語でスピーチするなど。英語を勉強したならば、誰かのために何かできるこ

とをやってみる。大人にありがとうと言われる経験をさせると生きがいになっていく。ちょっとしたことで生きがいの種になるのではないかと思う。

人口17,000人の中で、あるものの有効活用をしていく方法をみんなで考えていくことが大事だと思う。時間のあるお年寄りがたくさんいるということは資源だと思う。豊かな自然、ピーマン・ブルーベリーの産地、岩盤の強く地震に強い、まほら、歴民、環境創造センター、工業団地の最先端の工場などたくさんある。また、役場のよさもある。教育委員会と産業課や保健福祉課、子育て支援課などとの関係がフラットである。町民のためにいっしょにがんばろうとしているシステムがあると思う。

<町長>

事業所としての役場で職員を採用しているが、ここ何年か同じような感想を抱いている。自己肯定感が低い。採用した職員を見ると、成績は優秀だが、自信がないタイプが増えてきた。今までの体験の中で、人前で自分の意見を述べて、否定・肯定される経験が少なかったのではないか、成功体験が少ないのではないかという印象を持っている。他の事業所でも同じような声を聞く。

先ほど子どもの地域参加の話があったが、大賛成である。ただ、残念ながら、取り巻く人は冷ややかな人が多いのではないか。端的な例を挙げると、消防団員の勧誘をしても、親がやめておけと言う。自分の住んでいる地域を自分で否定するようなことでいいのか。子どもは大人の背を見て育つと言うので、なんとかならないのかとずっと思っていた。今回教育委員会の方と接点を持てたので、これから町の政策としてどういったことを行っていくか、項目を話していきたい。

まず、地域を支える人材を確保したい。特に子ども、0歳から18歳まで。太田委員がおっしゃった先人たちのインフラはかなり優れたものがある。これから次代を引き継ぐ人がいかに活用して、いかに伝えていくか。事情があって伝えていけないものは、どのようにしてあきらめていくか。容易ではない時代であるが、そういうものを基本に考えている。

一番の問題は、子どもが少なくなっていくことである。行政として手を出せるのは、タブー視されていた小学校統合問題である。まずは町と議会の間ではあるが、統合する・統合しないありきではなく、それぞれのいい面、悪い面、論理的に問題を共有してた上で議論に臨む基本的な姿勢を作ることには力を注ぎたい。基本的なものをお互い共有した上で学校関係者のみなさん、将来子どもたちが通うであろう利害関係者のみなさんときちんと段階を踏んで議論していきたいと思っている。

来年度、岩江地区を想定した認定こども園の構想を作っていく予算を盛り込んだ。岩江幼稚園をはじめ、岩江地区は一杯であるため、どういったものがあるのか考えていきたい。

田村高校の魅力化に力を入れていきたい。寄宿舎の整備をして、優れた学生がスポーツの成績を伸ばせるような基盤づくりは町でお手伝いできると思う。もう1点は学力の向上。公営の学習塾が島根県で結果を出しており、三春町でもできないかと思っている。学習塾の支援をしたい。また、陸上競技場が新しくなったので、小中学生にぜひ使ってほしいと田村高校から話があった。田村高校に関しては、この話を県にも意見表明している。

令和3年度より新庁舎で仕事が始まる。それまでの準備期間として令和2年度に組織体制の検討を考えている。地域の人と一緒に仕事をしていくための組織の組み方はどうしたらよいかという発想にして、場合によっては組織変更を検討しつつ、現実には即した職員体制や機構体制にしていきたいと考えている。

子供たちの多くが三春に戻ってきてもらって将来の三春を支えてほしい。また、三春町は特別支援教育が充実している。横断的な取り組みをし始めた頃の子どもたちが、社会に出ている頃になっていると思う。できれば現在どうなっているか知りたい。孤立していないかという心配もあるし、あるいは、誰かに才能を見出してもらって活躍しているかもしれない。

<教育長>

授業改革をする。方法は授業研究会で見ていただいたとおりである。子どもを見て子どもから何を学んだかによって、授業を作り直す。発想を変えて取り組むことについては、時間がかかるのは覚悟している。授業研究会において、教員が今まで何を中心に授業をしてきたのだろうと再確認が始まったところである。仕掛けどころが上手くいけば確実に変わっていくと考えている。学校教育アドバイザーによる学校訪問から始めたい。佐藤学先生は9月10日三春中学校で授業を見て講演をする予定である。また、教育学者の方々が各学校に直接出向いて授業を見て提案してをいただく。主体的・対話的で深い学びが実現すれば子どもが夢中で勉強する。子どもたちの目が輝く。子どもたちとの関係性が確実に変化する。学びあう関係ができる。簡単にはいかないが、研修を取り入れていくことで、一人ひとりを大切にしながら新たな授業の見直し、これは40年前から三春町が大事にやってきていることなので、間違いではない。教師と子ども、子どもと子ども、教師と保護者の関係が少しずつ変わることを期待している。時間をかけて取り組みたい。

家庭で勉強できない子どもについて、まほらに不登校の子が来たりする。子どもたちの場になると思う。拠点としてまほらは面白いと思う。

貧困問題と子どもたちについて、要保護準要保護の割合は19.6%である。5人に1人が行政の支援を受けている。

教育水準について、4月に全国学力・学習状況調査があり、全国との比較ができる。三春町の平均は全国より若干低いところにある。学校によっては上回る学校もある。授業のやり方を変えることによって、改善できる値ではある。

<渡辺委員>

中妻小学校の児童数少ない。郡山に近く、災害に強く、環境も良いので、宅地を造成すれば転入者が増えるのではないかと。人口も増えて子どもも増える。宅地造成の計画はないのか。

<町長>

平沢の四合田に宅地を29区画造成し、半分以上決まっている。御木沢小学校の児童数が増える可能性がある。町全体を捉えてみて、来年度から3年くらいかけて、農業振興地域整備計画の見直しをする。農業振興のための計画だが、一方では農業に向かないところを除外して原野・山林に戻すような作業も出てくる。除外した部分で宅地に適した場所が出てくる。地域と協議しながら全体像を掴まえていく。ここ数年で色々な状況がはっきりしてくると思う。

<渡辺委員>

御木沢で十数年前にお祭りが復活した。子どもが小さいときの経験は大切である。継続していく中で、衣装が古くなったときなど、町で支援してほしい。

<町長>

伝統文化の継承は、町づくりの中心においている。お金の出し方については、宗教的な問題などをクリアして担当課と詰めていく。

<宗像委員>

小学校の統合について、何人かの町議員と話をすることがあったのだが、なぜ統合するのかと聞くと、人が減っているから、という話になる。どうやったら残せるかという話をしてくれない。人を増やして残す方法はないのかというと、それは無理だと一蹴されることが多い。平沢の宅地造成の例にもあるように、具体化してくると方向が変わると思う。町議員と上手く話をしていただければいいと思う。地域の方々もそうおっしゃっている。人を増やすようなことをしてほしいということであった。

教育の質について、上位層の伸び悩みがある。テコ入れする方法がないか。学力もひとつの個性である。運動であれば特別チームを組んでやっている。

<教育長>

授業改革のねらいのひとつが、共有とジャンプという授業の作り方を変えましょうというものである。共有というのは、基礎をきちんと学んだ上で難しいものに挑戦するような学びを作ることが大前提なので、みんなできる・みんなが分かるという授業は、15分するとできる子は足踏みして待っているだけの時間とされている。どの子どもも高いレベルの学びができるためには、どうしようかというところが授業改革のもうひとつの柱である。どの子どもたちにも主体的な学びの上に自分の学びが知的に高まっていくことで、勉強が楽しいと捉えさせていくもので、授業改革の柱に入っているものである。

<宗像委員>

誇りを持つことについて、三春の町歌を知らない。成人式で初めて聞く人が多い。小学校で教えているのか。

<教育長>

小学校で教えている。回数の問題かもしれない。卒業式や入学式では歌わない。

<太田委員>

小学校の鼓笛隊で演奏した。学校教育は不思議なもので、学校でやらないことは、大人になってもできない。

<宗像委員>

避難所のエアコン設置に対する国の補助金がある。公共施設にエアコンを設置して災害があった場合に使用するという補助金である。民間企業が補助金を使ってエアコンを導入し、その代わり災害時には施設を開放して避難者を受け入れする。町の体育館に設備を補助金を使って入れてはどうか。

<宮田委員>

課題は山積だと思うが、全部町でというのは大変なことだと思う。教育の民間連携を考えて

いるか。

<町長>

アートクリエイトも連携のひとつである。

<教育長>

高校生対象の動画配信で、マンパワーというよりはシステムパワー。場所の提供とコーディネートの方が決まれば、あとはお金の問題だと思う。全国トップの予備校の授業を画面を通して見るということになっているようだ。

<宮田委員>

改善、改革というと現状がよくないということが前提になる。現場の教員はどう受け止めているのか。

<教育長>

学習指導要領の改訂がひとつのきっかけである。そこで打ち出されているものに関して、どうすることが自分たちに課せられたものの解決になるのかがポイントで、今までだめだからこうしようというのではなく、授業のあり方も変わる時代だということをみんなが言い始めているのが追い風となっている。受け止めるタイミングになっている。

<太田委員>

こういった場で話ができて、これからの三春の姿をイメージできることが嬉しく思う。

自尊感情が低いことについて、本を読んだが、自尊心が高い先生や親に教えられると、子どもの自尊心も高くなるとのことだった。親も自分の良いところに自信を持って子育てに繋げてほしい。自尊感情の高い三春町の町民になっていきたいと思う。